

大学とは何か — 歴史に尋ねる

名古屋大学名誉教授、中部大学教授

安藤 隆穂



経済学博士。専門は、社会思想史・経済学史。2009年フランスを中心とした自由主義思想の成立過程の研究『フランス自由主義の成立—公共圏の思想史』（2007年）で日本学士院賞を受賞。

「大学の<知>の現在を考える」名大アゴラ・連続セミナー（第1回）より

はじめに

名 大アゴラは、「今、大学人は何をすべきか」について、気軽に語り合いましょうということで企画されました。今回は、第1回ということで、そもそも「大学とは何か」について考えてみたいと思います。できるだけ自己体験に引き付けてお話ししますが、抽象的になることは否めず、具体的な行動提起には程遠いということを、あらかじめお断りしておきます。

1. 現代の大学が活力を取り戻すために

私 の専門は、フランスを中心とした社会思想史の研究です。これまで「大学とは何か」という主題を真正面から議論した経験はありません。それで、少し予習してきました。おびただしい本がありましたが、そのなかで、吉見俊哉さんの『大学とは何か』（岩波新書、2011年）と『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社新書2016年）という二冊は、大変刺激的でした。大学の歴史について、大変丁寧に整理された上で、現代の大学が直面する課題がわかりやすく示されています。

吉見さんによれば、文系の知・人文学の存在意義は、目的や価値の軸を発見し創造することにあります。ところが、現在の大学では、コンピテンス（活用や処理能力）のみが重視され、人文学的教養への関心が空洞化してしまいました。だから、現代の大学が活力を取り戻すためには、技術的な成果にこだわる次元を乗り越えなければならないし、教養を問い直し、人文学を再生させなければならないと、吉見さんは主張されています。

「名大アゴラ」の課題と目的

吉見さんは大学行政にも大きく貢献されていますので、大学の存在意義への理念的問いを深く掘り下げるように語られています。これに対し、「名大アゴラ」の課題は、大学の知と生活の知の結合を追求することです。そこで、今日は、吉見さんの議論を参照しながら、大学の歴史を、大学が生活の知に向かってどのように開かれていたのかという視点から考察し、ささやかですが新機軸の大学像を提出してみたいと思います。一方で、ギリシャのアカデミアに視野を広げ、他方で、近代の公共圏の意義を強調するなどして、吉見さんの受け売りに終わらないようにいたします。大学と学問の発展は、生活とその知恵の変容に結びつきながら可能であったのだし、社会に向かって開かれた大学と学問を創造するための方法を問うのが、「名大アゴラ」の目的だと思うからです。

2. 時代の転換期の中で考える ～何故、何を、学ぶのか

話 を大げさにしてしまいましたが、私は、大学史については素人でしたね。そこで、「名大アゴラ」を談論の場にしたいという意図に甘え、以下、大学人としての私の自分史に引き付けて、大学の歴史の相当我流の解説を披露することにとどめさせてください。

自分と世界を結び付け、時代と向き合う

私は、1949年生まれで、1968年に名古屋大学に入りました。「68年世代」という言葉がありますが、「大学闘争」の時代でした。東西冷戦に綻びが出てきて、東側では、民主化を進めようとしたチェコにソビエトが軍事介入をし、西側ではベトナム戦争があり、沖縄からベトナムに向かって米軍の戦闘機が飛び立っていました。高度成長のひずみが出て、水俣病などの公害が深刻な問題となり、この近くの四日市でも、大気汚染でお日様が見えないような、大変な状況でした。学生は、時代の転換を感じ取り、世の中について自分について、要するに、何故また何を学ぶかを切実に問いかけていました。

たとえば、1968年の夏休みには、日本大学で、大学の管理運営や学費をめぐる、学生が経営者を追求する万人規模の集会や団交を行いました。1969年度の入学試験を中止に追い込んだ東京大学の紛争については、今日ここにお集まりの皆さんもご存知と思います。皆、自分が何者で、どこに行こうとしているのか、五里霧中の中で悩んでいたのです。私もまた、たくさんの本に助けられ、自分と世界とを必死に結び付け、かろうじて、時代と向き合い生き延びたと思っています。私にそのように悩み考える勇気をくれた作品のなかから、三つを紹介します。

一つは、「九条の会」創設者の一人、加藤周一さんの『言葉と戦車』（1969年）という本です。チェコにソビエト軍が介入したときに、なぜあなたたちはここに侵入してくるのだと、無防備の民衆が問いかけた。その言葉の前に、戦車に乗った兵士たちがうなだれていた。このように加藤さんは述べ、言葉によって生きる人間が自由の言葉を紡ぐ限り、どんな権力もこれに勝てない

と教えていました。

二つめは、石牟礼道子さんの『苦海浄土 わが水俣病』（1969年）という本です。水俣病という過酷な状況の中にありながら、その苦海の中から、新しい人間と言葉と希望が生まれていることを教えてくれました。写真は当時の石牟礼道子さんです。すばらしい表情ですね。こんな素晴らしい人がいる時代なのだと思うと、絶望せず現実と向き合う力が湧いてきました。



写真：石牟礼道子さん

三つめは、エディ・アダムスという人が1968年に撮影したベトナム戦争の写真シリーズ、特に「サイゴンでの処刑」と呼ばれる有名な一枚です。HPで検索をすると見ることができると思いますが、それは南ベトナムのゲリラ（本当にゲリラかどうか分かりませんが）を、米軍人が射殺しようとしている写真でした。ピストルを持つ軍人の姿には、沖縄から飛び立っていく米軍機、これに加担する軍事研究などにつながり、日本の大学生の私が加害者として凝縮表現されていると思いました。学生としての日常と学問と戦争の絶望的結びつきを一瞬にして可視化する作品でありながら、私たちに、現実から目をそらさない知性の力を運んでくれるように感じました。

これら三つの励ましは、残念ながら、すべて大学の外からのものでした。大学の中、特に先生たちからのメッセージはどうだったのでしょうか。当時の学生の多くは、東京大学の大河内一男総長が入学式で述べた「太った豚より痩せたソクラテスになれ」という言葉を、「大学とは何か」という問いかけとして受け止めていました。私もこれを重く受け止め、ソクラテスやギリシャ哲学に接近しました。当時の私の思考を思い出しながら、ギリシャのアカデミアについてお話しし、今日の本題、「大学とは何か 一歴史に尋ねる」に入っていこうと思います。

3. アカデミア ～若く美しくなったソクラテス

ソクラテスは、なぜ学ぶか、知とは何かとギリシャ市民に問いかけました。立派な政治家や科学者が専門知あるいは技術知を持ちながら徳に欠けることを暴きました。これをうるさく思った市民は、秩序を乱した罪で、ソクラテスを裁判にかけ死罪を言い渡しました。ソクラテスの死を悔い、ポリス（都市国家）を徳による政治（哲人政治家による統治）体制のもとに置くために、有徳な人間、すなわち「若く美しくなったソクラテス」を育てる機関として、プラトンがB.C.387年に設立したのが、アカデミアでした。だから、アカデミアでは、「魂の目を向けかえる」ことが目標とされ、そのために、数学、天文学、音階理論、哲学問答法など、広い意味での「哲学」が科目の基礎におかれしました。

国家の知＝アカデミアの知

私は、大河内総長のメッセージを受け止め、ギリシャ哲学も少し学習し、それでは、現代にあって徳とは何だろうかと考えましたが、他方で、こういう思考はエリート特有の閉鎖性を持つのではないかと疑問に思いました。そもそも、ギリシャ市民が奴隷の支配者であったということも、ギリシャ哲学への違和感を私にもたらしました。

私たちの時代の大学進学率は20%ぐらいでした。だから、大学に入るのは運がいいというか、ある程度恵まれたものに限られていました。机に向かって勉強するという習慣を身につけることができる人が、すでに特権者でした。農作業や家事手伝いで勉強時間の得られない友達、ミカン箱を机とした友達、そんな彼女や彼を置き去りにして大学に来たという孤独感が、私にもありました。また、私たちの親の世代は、戦争をくぐり抜け、二度と戦争をしない知恵を子供には身につけてほしいという思いから、乏しい生活費を切り詰め学費を出してくれたのでした。そのためか、私たちには、学問の自由を享受することへの罪悪感のようなものがあつたように思います。そうした思いには、ギリシャ哲学は、「なぜ学ぶのか」と問う余裕のない圧倒的多数を置き

去りにしたエリートの閉鎖的思考ではないかという疑問が、つきまとったのです。

私は、当時、「ギリシャ哲学は、何をどう学ぶかを教えてくれても、誰が誰と学び誰になるのかは教えてくれない」と、生意気に言っていましたが、ギリシャのアカデミアの知が国家の知であり、民衆に向かって開かれたものではないという思いは、今も変わりませんし、ギリシャ哲学の言葉に接するときの自戒の念としています。

4. 開かれゆく学問

学問が社会に開かれる形で存在するようになるのは、中世の大学からであり、吉見さんも大学の歴史をここから始めています。中世の大学の成立は、中世都市の勃興とともにあり、都市間のネットワークに密接に連動していたのです。

中世 ～都市連携・自由7科

15世紀には、ヨーロッパの諸都市に70～80ぐらいの大学が出現していました。ピサ、ボローニャ、パリ、プラハ、ウィーン、ハイデルベルク、オックスフォード、ケンブリッジなどの大学がよく知られています。これら中世の大学は、リベラルアーツといわれる文法、修辞学、算術、幾何学、倫理、天文学、音楽を基礎教育とし、その上に専門的な知識を多様に生み出そうとしました。大学は、専門知のみならず教養知の創造の先頭に立ち、新しい知のネットワークを発展させたのです。

中世の大学が生んだ知識人の典型は、たとえば、吉見さんによれば、コペルニクスです。コペルニクスは様々な大学で多分野の学位を取得します。最初、古典学を学んで司祭になり、つぎにボローニャ大学で教会法の学位を取り、さらにパドヴァ大学で医学の学位を取る。つまり、コペルニクスは、様々な専門知を組み合わせる総合知の達人でした。むしろ、総合知の素養

こそ、たとえば天文学という専門分野を発展させる原動力であったのです。知識人は、多様な都市を自由に移動し、各地で特有の専門知を習得し、都市の生活と学問をネットワーク化し、都市の時代にふさわしい総合知を創造していったのです。吉見さんは、中世の大学には、現代の大学と人文学の再生のための大きなヒントがあると、強調されています。

しかしながら、中世から近代へという歴史の歩みを視野に入れるなら、中世の都市と大学は、極めて限定的な空間を保持していたにすぎません。民衆の圧倒的多数は封建制と共同体的拘束のもとに閉じ込められた農民および職人でした。中世の大学の持つ狭隘性は、学問あるいは科学と技術との乖離と対立に表れています。大学の学問は、技術を軽視あるいは無視し、技術につながる民衆の日常生活を軽蔑していたのです。

近代 ～公共圏の成立により学問が日常生活に結合

近代の成立は、中世の大学にあった閉鎖性を打ち破り、学問を社会に向かって飛躍的に開く状況を生み出します。結論を先取りしますと、文化資本および「公共圏」の成立と発展が、一方で、学問を日常生活に結合し、科学と技術との連携に道を開き（「科学革命」の時代）、他方で、学問の組織と推進を国家と国家機関としてのアカデミーが積極的に担う状況を作り出していくのです。

まず、近代の成立についておさらいをしましょう。近代の開始をいつとするかは諸説ありますが、1648年のウエストファリア条約を指標とするのが有力です。この条約は、中世最後の世界戦争といわれる30年戦争に終止符を打ち、主権の相互承認という原則を打ち立てました。背景には、世界経済システムが成立し、富の中心が土地から商品に移り行く中で、伝統的秩序の解体が進み、戦争を誘発したことがあります。世界経済システムの実態は、三角貿易体制といわれるものでした。イギリスなどの西洋の資本主義先進国が、アフリカで黒人奴隷を商品として購入し、かれらをアメリカに送り込み、そこでプランテーションを経営し原料品を生産する。その原料品を西洋が安く買い占め、これをもとに低コストで工業製品を商品として産出し、輸出す

る。こういう世界経済の循環システムが、商品経済を発展させ、土地を支配収奪する体制としての封建制を解体し、中世を戦乱に巻き込んでいったのでした。そして、その戦争は、ともに正義を掲げる宗教戦争という形をとり、一方で、古い共同体的生活秩序を解体し、他方で、新しい政治秩序を模索していくことになります。

ジャック・カロという同時代人が30年戦争を描いた『戦争の惨禍』と題された有名な銅版画シリーズがあります。そこでは軍隊による略奪と民衆虐殺が細かく描かれています。戦争の本質が、政治的支配者すなわち主権同士の争いである以上に、軍隊による民衆の収奪であることが見事に示されています。



30年戦争を描いた『戦争の惨禍と不幸』（ジャック・カロ：1633年）
（引用：『世界版画大系3』筑摩書房1973年）

こういう戦争の性格は、現代において極限に達したことも確認してください。たとえば、第1次世界大戦の時には、死者に占める軍人の比率が90%以上でした。しかし、ヴェトナム戦争以降の戦争では、死者の95%以上が民間人となりました。たとえば、新聞が戦闘員一人の死亡を報告するとき、私たちは、背後に、100人近い民間人の犠牲があると認識しなければならないのです。話を戻して、プロテスタントとカトリックがそれぞれの正義を掲げて戦った30年戦争が、住民の大虐殺に至る消耗戦であることが歴然とする中

で、主権の相互承認と内政干渉の取りやめを骨子に、ウエストファリア条約は締結されました。主権すなわち国家の独立を承認し、主権の連合体制として世界秩序が構想されることとなったのです。

このウエストファリア体制の下で、近代的個人の自立、近代的社会関係、公共圏、市民、主権、国家という近代の内実が発展していきました。主権の独立によって、それぞれの国家の内部で自由権が認められ、自由な職業人が力をつけ、商業社会が発展し、そこで財産を得た人びとを中心に自由な社会への歩みが始まります。それが知識と学問の存在形態も変えていきますが、とりわけ、公共圏の成立が重要です。

(1) 市民の時代が到来

商品経済の発展は、一方で、中産階級を中心に新しい教養層を生み出し、喫茶店やサロンなどの広く民衆に開かれた知的コミュニケーションの場を多様に生み出し、他方で、ゲーテンベルクの印刷術によって文字によるコミュニケーションの商品化と普遍化を促進しました。この新しい環境の中で、人びとは、自由な個人として意見を持つ主体となり、公論を生み出し、政治と主権を制御する力を持つようになっていきます。このように公論を生むコミュニケーションの空間を公共圏といい、これによって、人びとは、市民としての主体性を養い、主権者として自己主張し、市民革命を準備していくのです。

公共圏の成立と発展は、学問を中世の大学と都市ネットワークの持つ閉鎖性から開放することにつながるはずでした。今や、知識と学問の発展の活力源は、近代社会と公共圏という人びとの生活圏に移行したからです。事実、生活の知恵としての技術が科学と結合し、学問は、経験的実用的なものとなり、社会や国家を動かす有用的な力とされるようになりました。たとえば、18世紀フランスの『百科全書』の刊行は、そのような実用知としての学問の集大成でした。

(2) 「人間と市民の諸権利の宣言」、コンドルセの体系(人間と市民の創出)

ところが、このような知の近代の変貌に、大学はうまく対応できませんでした。多くの大学は、中世の学問体系の保守に固執し、吉見さんも、この大学の姿勢について、「大学の第一の死」という刺激的な表現をされています。そのような状況の中で、近代の学問の発展を先導したのは、大学ではなく、国家機関として設立されたアカデミーでした。

国家は、主権としての力を強化するために、公共圏の力を吸収し、知的先導を独占しようとして、イギリスでもフランスでも、やがてドイツ圏でも、多様な分野のアカデミーを設置していきます。たとえば、イギリス王立協会とニュートンの関係などを思い浮かべてください。アカデミーの守備範囲は、科学と技術の推進のみならず、国語の整備、経済、法、統治の学問の発展に至るまで、広大な領域におよぶものでした。

こうした学問の発展は、一方で、知識人のエリートの孤立と国家依存とを強めました。他方で、成長し力をつけた公共圏が、近代知の国家独占を打ち破る時代も準備していました。それが市民革命です。1789年開始のフランス革命が、古典的市民革命といわれます。池田理代子さんの人気漫画『ベルサイユのばら』から、私の好きな場面を見ていただきます。「自由であるべきは心のみならず!! 人間はその指先一本、髪の毛一本にいたるまで、すべて神の下に平等であり、自由であるべきなのだ」と主人公が叫んでいます。このような自由平等を求める近代的個人の意志が、1789年、「人間および市民の諸権利の宣言」に集



基本的人権を叫ぶシーン

©池田理代子プロダクション

約されます。人間とは基本的人権を生まれながらにして持つ尊厳ある個人であり、その個人は市民として主権を確保運用すると宣言したのです。

(3) 市民の大学

それでは、どうしたら、すべての人が自由平等な個人となり、また市民とすることができるのでしょうか。フランス革命は、公教育によってと答えました。つまり、すべての個人は、教育によって、学問と教養を手に入れ、基本的人権と主権の主体となることができるとしたのです。教育は、国家とエリートに独占されていた学問を、公共圏を取り戻す方法でした。このような教育の構想として、コンドルセの教育プログラムが、有名です。コンドルセは、男女共学による無償の公教育を主張し、教育の自由自治の原理の下、科学と技術の基礎、経済、法、政治の基本原則を含む人文学的素養をすべての個人が身につける段階的教育プログラムを提案しました。

コンドルセは教育の最終段階に大学さらには学術院を置きましたが、ここでの大学が、ギリシャのアカデミアのような国家機関ではなく、中世の大学のようなエリートの共同体でもなく、教育自治を主張し、社会と知を循環させる自由な個人を育てるものであることは、明らかでしょう。何をどう学ぶかだけでなく、誰が誰と学ぶかが問い直され、大学と学問は公共圏のものとなったのです。

ところが、フランス革命は、まもなく、コンドルセの道を閉ざしてしまいました。革命はナポレオン独裁を生み出し、ナポレオンは国力増大の基礎として、科学技術を中心にアカデミーを再組織していきました。自由な個人を育てる教育と学問に代わって、エリート専門人を確保する選別教育体制が復活強化されたのです。

(4) 国民国家の大学と近代の変容

しかし、このナポレオン帝政の時代に、その侵略に抵抗した諸地域、特にドイツ圏で、新しい大学が誕生してきます。ナショナリズムの高揚の中で、国民を創り育てる教育機関の必要が叫ばれ、ドイツ古典哲学による教養教育を基礎に据えた、いわば「国民の大学」が出現したのです。

たとえば、カントの大学論に、この新しい大学像の典型があります。ここで吉見さんの要約を借りますが、カントによれば、一方で、大学には、上級

学部として、神学、法学、医学が置かれますが、これらは、どれも、大学外の団体の活動に役立つためのものであって、神に奉仕する、国家に奉仕する、医療に奉仕するなどの実用の学問です。他方で、下級学部におかれる哲学の目的は、総合的知識を持ち、自由に思考し、正しく判断する人間を育てることにあります。そうして、カントは、哲学すなわち教養の修得を重視し、そのための学問の自由と独立を擁護しました。専門的知識人のみならず、人間そのものを生み出すことに、大学本来の使命があったとしたのです。

このようなカントおよびドイツ古典哲学の思考を踏まえ、フンボルトは、大学での文化と教養の修得過程をさらに強調し、人文学的基礎の上に専門知が花開くという国民大学像を確立しました。先ほど私は、フランス革命期の教育が、社会と知識を循環させる自由な個人を育て、学問を公共圏に取り戻すことを目指したといいました。それが可能であったのは、社会と公共圏の側に、近代的成熟が進んでいたからでした。しかし、ドイツには、そのような条件は未熟あるいは欠落していました。したがって、ドイツは、大学の中で、純粹培養的に、自由人と公共圏とを生み出し、強力な国民と国家を再生産しようとしたのです。近代化の遅れたドイツは、逆説的に、エリート知識人を育てるのみならず、むしろ、自由な人間と国民を生み出す機関として、文字通り「国民国家の大学」の範型を確立することになったのです。

ドイツ近代化の遅れが、大学の中に矛盾を持ち込んだことも指摘しておきます。大学が緊張関係を持つべき社会と公共圏が未成熟ですから、大学の中で、社会と国家の対立が先取りされることになります。したがって、教養課程では、学問の自由と国家機関としての責任の葛藤が常に存在し、個人の基本的人権と国民としての義務との矛盾、特に自由と権力との矛盾が強く存在することになったのです。ここでは、学問を可能性としての公共圏へと開くために、大学の自治と学問の自由の確保が、とりわけ強く要請されることにも、注意してください。

大学のドイツモデルは、圧倒的な影響力をもって、イギリスや北米、さらには明治以降の日本などに伝わっていきます。教養課程が重視され、科学や技術のみによっては人類の平和的共存はできず、国家の力と要請から自由な

人文学が必要であるという大学像が、普及していきました。

大学の近代的発展の概略は、以上のようになると思いますが、そのなかで、アメリカでは、大学をより社会に向かって開こうという試みが行われ、これが、19世紀後半以降、大学の現代の変容を生み出します。このあたりの動向も吉見さんの著作に適切な整理がありますが、アメリカで産業社会が充実していくに伴って、大学と社会との連携の強化が必要とされ、これによって教養の概念が変質したことが、キポイントです。単純化して言えば、教養のコンピテンス化が要請されたのです。修得した知識を社会で実際に有効に活用できる能力を高めることが、共通教育に要求されるようになりました。アメリカの大学でのリベラルアーツは、ドイツの大学の教養にかえて、知識を社会で活用できる総合的実践力の修得を目指すものとなったのです。

このように、アメリカの大学は、社会に向かって大きく開かれるものとなりました。しかし、それは、大学の近代が目指した、公共圏と学問との結合を意味しませんでした。コンピテンスの偏重と教養の空洞化という、初めに紹介した吉見さんの大学批判にあるような状況の開始も意味したのです。学問の産業奉仕体制が、自由な個人と国民を育てるという教養主義を解体していきます。マックス・ウエーバーも『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904年論文公表）で、資本主義的人間疎外が最後に生み出す「精神なき専門人と心情なき享楽人」が、アメリカでは大学の中にすでにみられると示唆しています。アメリカの大学では、学生が人文学に対してもスポーツ競技のように接し、単位取得競争を行っていると言っています。こういう状況が極点に達し、産学連携の強化の中で、人間を育てる教育は可能かということが、今、世界と日本の大学が問われているのだと思います。

以上、ギリシャのアカデミア、中世の大学、近代の公共圏の成立による学問の変化、ドイツの国民の大学、アメリカでの大学の現代化という順番で、大学の学問と人びとの日常生活とのつながりを問うという視点から、歴史的考察を加えてきました。特に、中世の大学、ドイツの大学、アメリカの大学については、吉見さんのお仕事から知識を多く借用しましたが、大学の歴史の風景は、相当に変えたと思っています。私たちが今、大学を社会に向かっ

て開くにはどうしたらよいかを考える、ヒントにして頂ければと思います。

(5) 日本の大学

日本も近代以降、ドイツとアメリカの大学の制度と経験に特に学び、教養教育を大切にする国民の大学をつくってきました。日本の大学の歴史について述べる時間が無くなりましたので、一つだけ指摘いたします。それは、大学が公共圏に開かれているとき、人文学は活性化し、公共圏に閉じられるとき、人文学は窒息し、大学は権力と戦争に協力したということです。

たとえば、大正デモクラシーの時代、大学と公共圏は連携し、知的リーダーシップを発揮しました。東京帝国大学の吉野作造は、雑誌『中央公論』を中心に活動し、民本主義を広げていきました。ところが、昭和の美濃部達吉東京帝国大学名誉教授は、1935年の天皇機関説事件で糾弾され、立憲主義は窒息し、大学の人文学も弾圧され、東大の第二工学部創設にみられるように、産業特に軍事技術中心に、大学の再編が進みました。最後の帝国大学となった名古屋大学には文系学部の設置は認められなかったのです。

戦後の大学の歩みについても、戦前に近い問題を指摘することができます。1960年安保闘争の時代、丸山眞男の学問にみられるように、大学とジャーナリズムが連携し、知識人と平和運動、民主主義、労働運動の協働が実現しました。ところが、私の学生時代の1970年には、大学と社会との同じような連携はもはや困難となっていました。私を励ましてくれた加藤周一や石牟礼道子という人たちが大学の外にいたということは、すでに述べました。宇井純さんの「公害原論」講座や高木仁三郎さんの原子力批判の活動を、大学は極めて冷たく処遇したのでした。

5. 現代の大学と公共圏

現在、産・軍・学の連携が強化される中で、学問の自由は衰弱しています。どうしたらよいのでしょうか。

私は、大学が世俗から独立した共同体ではないことを、すなわち、一方に主権や国家があり、他方に公共圏とか社会生活と社会運動があり、その交錯の中で大学は、普遍的な真理、価値を創造するということを、今こそ思いおこす時だと思えます。とりわけ、吉見さんの言う人文学の再生を、大学の価値創造行為が、社会に開かれ結び合う形で、成し遂げていくことが、重要だと思えます。

大学（教育：右肩下がり）を公共圏に

確かに、抽象度の高い大学の学問と日常的な社会生活とを結びつけるのは至難の業のように思われます。しかし、日常生活と学問に共通するのは、言葉と概念です。したがって、概念の検証を、大学と社会が共同で遂行する場を、日常的に確保することから始めればよいと思えます。公共圏の出張場所を大学に創ることといってもよいですし、私はそれが「名大アゴラ」だと考えています。

一つの例を挙げます。それは「ヒロシマ」、「ナガサキ」という言葉です。カタカナで書くように、これらは、すでに世界語となっており、平和学にとっての基礎概念です。そうして、今、この基礎概念の定義をめぐって、世界中で、日常語としても学問的概念としても、争いがあるのです。

東京大学の小森陽一さんに教えられたことですが、2001年の9.11アメリカ同時多発テロのとき、アメリカの政権は、襲ってきた飛行機をカミカゼ、破壊されたセンタービル跡地をグラウンド・ゼロと名付けました。グラウンド・ゼロは、原爆投下直後の広島・長崎のことを意味する言葉でもあります。そうして、アメリカは、テロを許すな、グラウンド・ゼロを許すなという合言葉のもと、「テロとの戦い」という復讐戦争を始めました。悪に対する正義の戦争という同じ空気は日本でも共有されました。

しかし、これは、日本と世界で、広島、長崎を思い平和運動を持続してきた人たちへの、すさまじい侮辱です。「ヒロシマ」、「ナガサキ」は、二度と戦争を許さないという誓いを私たちの身体に刻む、平和運動が育てた世界語です。それを、アメリカのテロとの戦いは、復讐への出撃基地という意味に変換し、戦争動員のメディア戦略に用いようとしたのです。このように、現代の戦争は、まず、公共圏での言葉の意味をめぐる文化的争いによって準備されます。そうだとすれば、大学の知性は、自らこれを磨く以上に公共圏に常に繋がっていることが必要なのです。

人間を問い、人間とともにある知性

タルコフスキーの作品に『サクリファイス』という映画があります。主人公は国民的名優として名をはせた老人です。彼は、喉の手術によって言葉を失った少年を伴い、海辺に枯れた日本松を植え、これに毎日水をやっています。ある日、テレビで、核戦争勃発は間違いなしと知らされ、無神論者の彼は、自分の持つすべてを犠牲とするかわりに愛する人たちを救ってくれと、神に祈ります。奇跡が起こり、核戦争はおきませんでした。神に感謝し、彼は、神との約束を守り、犠牲を捧げる儀式をはじめます。最後のシーンは秀逸です。日本松に若芽が出てきます。これはダンテの『神曲』のイメージですが、波間に反射した光に包まれる松の画像が、とても感動的です。そして、あの子供が言葉を発します。それは、「はじめに言葉があった」という『聖書』の一節です。人間が人間の言葉を紡ぐかぎり、人間は核とその戦争に負けない。そのような「確信と希望」を、私は、この映画からもらいました。この映画では、日本松、日本庭園、それから、ヒロシマの画像が決定的な瞬間に使用されています。つまり、この映画では、『聖書』、ダンテを継ぎ、ヒューマニズムを再生させる力の源泉に、ヒロシマという平和運動が紡いだ概念が置かれているのです。ノーベル賞を受賞したスベトラーナ・アレクシエーヴィッチさんの『チェルノブイリの祈り』（1997年）にも、同じメッセージを読み取ることができるでしょう。「テロとの戦い」とアメリカが名付けた戦争は、映画や文学がヒロシマに喚起され、且つ、励まされ育ててきたヒュー

マニズムの思想と文化に対しても、侮辱と破壊を仕掛けるものなのです。

言葉あるいは概念は、日常と学問とを密接につないでいます。日常と公共圏での言葉の変容に鈍感な学問は、どれだけ精緻となっても反人間的となるのではないのでしょうか。したがって、大学と人文学の再生は、公共圏に耳を澄ますことから始まります。

おわりに

2015年11月13日のパリ同時多発テロで妻子を失ったジャーナリストのアントワヌ・レリスさんが、テロリストに憎しみを返さないというメッセージを世界に発信しました。暴力による復讐の連鎖を断ち切り、戦争そのものをなくそうという、静かで力強い決意表明でした。多くの人たちが、ヒロシマ、ナガサキという言葉を思う時と同じ感情を持って、これを受け止めたと思います。私たちがこのように、言葉と概念を再確認し、この言葉につながる日常生活と学問を再検証することこそ、平和への大切な一歩なのではないでしょうか。たとえば、「立憲主義とは何か」などの適切な主題を設定し、学問と日常が出会う小さな場を数多く多様に作り出し、日常の思想と学問の思想とを結び、それぞれを豊かにしていくことが大切です。「名大アゴラ」は、ささやかな集まりですが、自由な個人となるための連帯の場所としたいものです。

ありがとうございました。(拍手)